

芥川だより



芥川の写真屋さん

編集発行人 下村嘉明

発行所着物から服を仕立てます

高槻市芥川町2-14-3

TEL 072-681-8870

梵

発行日/2007年9月20日

ご希望の方にはお送りします

お気軽にお問い合わせ下さい。

e-mail: akutagawa_dayori@yahoo.co.jp

二ℓの水



水場の少ない山の稜線を歩く縦走では水は大切なものである。特に夏山縦走に於いて、どうしても担がなければいけないのが二ℓの水である。野営を毎日繰り返す山行で、出来るだけ軽くしたい荷の中で担いで運ぶとなると重い水を少なくしたいのは山々だが二ℓの水を減らしてはいけない。遭難事故につながるからだ。

「誠に申し訳ないお願いなんです、水を少し分けてもらえませんか」三十前後と見られる男は私の隣にいた男に尋ねた。私は一瞬「助かった、私に尋ねられなくて」と安堵した。ここは立山連峰の縦走路であるスゴの頭の稜線である。

目指す野営場はまだ遠い、猛暑からバテ気味の私は道い松の木陰で休んでいた。

六十過ぎと見られる男が登ってきて私に声をかけてきた「暑いですね。このコースがこれほどしんどいとは…」。私も「自分も初めてなんです、軽く考えてました。中々のコースですなあ」と応えた。そこに三十頃とみられる男がバテ切った感じで登ってきたのである。彼は我々の近くにザックを下ろして、水をくれと言ってきた。「水をくれ」その言葉にギクッとした…。山を縦走する場合一人に二ℓの水を、手付かずで次の野営地までザックに入れて運ぶ。これは「山登りの基本」である。飲みすぎてなくなる事もあるかもしれないが、行動中飲む水は別に用意する。

しかし、理屈はどうであれ「水が無い」と言っているである。次の瞬間、頼まれた六十の男は「ああ、いいですよ。この水でよければ」と言って差し出した。三十の男はコップに注いで美味そうに飲んだ。二杯続けて飲んだ。それを見た六十男は、早々に荷を担いで出発した。私も彼を追うように立ち上がった。実は私のザックの中の二ℓの水は半分近くになってしまっていたのである。あまりの暑さと、久しぶりの山行からか、山の基本も残り少ない水と共に飲んでしまっていた…。

芥川商店街歳時記

今月の予定

○秋のセール11月1日～4日までの4日間。最終日に青空ライブ同時開催

○アーケード防塵訓練11月18日(日) 午前 9:30～10:30 日の出町自治会と合同

○小学生の商店街の見学。10月10日・真上小学校。10月5日・南平台小学校。10時から

深奥幽玄手談の交わり

囲碁で豊かな人生を!



日本棋院高槻支部

芥川囲碁サロン

(株)入谷商会経営

日本棋院棋士谷村義行八段による

大盤解説毎月第二日曜日午後2:30より

指導碁毎月第二日曜日午後4:00より

高槻市芥川町2-10-11(芥川商店街)

TEL・FAX 072-682-0403(代)

夕方、黄色の葉っぱになった花木に水まきをする時、水にふれたところから再び青々となっていく。それを見ているだけでも涼しい気持ちになったように思う。このまき水も自分が暑いからといって日中だと却って枯らしてしまうことがある。

坐っていても暑い夏

家の中でも、電車の中でも車でも、屋内と言えるところは、エアコンデイショナーで温度管理されていて、涼しく、過ごしやすくなっている。冷蔵庫の中には冷たい飲み物や氷菓がいつも入っている。道を歩いていてもいたるところに自動販売機がある。

夏の暑い最中に力仕事をしたり、農作業をしたり、運動をして、吹き出るほどの汗をかくと、ほんの少しの風でも清々しくなれるもの。

「ああ、ここは「極楽の余り風」が吹いてますなあ」と目の前で大きな奥さんが立ち止って汗を拭いている。ここまで歩いてきて、ほんとうに暑かったのだろう。全く面識のない私に声をかけてくるんだもの。極楽の風は涼しいと感じて、ほんの少しでも、しあわせがあったのかもと思ふ。

モノに囲まれ、苦しみから遠ざかり、安定した生活をし、気持ちのよいことを経験できるようになったのに、

なぜか、心の底にはポツカリと空洞が空いている。「よろこび」がない。これが現代を生きる私たちの心象風景なのだと思う。

お盆がすむと、すぐまたお彼岸になる。お盆の供養は、先祖様に榮養をつけて頂くといった行事だし、お彼岸の供養は故人が供養を受けて、霊魂がより浄化される行事というには、お寺の坊さんから毎度聞かされるお話。亡き人に手を合すと同時に、悲しい時、淋しい時、「ここに居る」と誦えてみよと、教えられて、聞かされている昨今。

犬の視線

猫や犬などを見たからといって俳句が浮かんで来るような粋人でない。どちらかと言えば何事にも疎い。

主人が散歩用の帽子を被ると、目を輝かせ、尻尾を振って、やれ、散歩だとかまえている。

その表情が何んともいえない。一緒に住めば家族と同じ、我が子、我が孫と同じに可愛い。

人が来ると元気一杯の声を出して、ほえつく。これが特技なのだから許しておく。どこかで手がゆるんだのかイ気になっている。フスマを破る。フスマのさんから顔を出して見ている。

これ見たか。あちこち穴だらけ、但し仏間のフスマだけは安全、きつと私の留守に怒られたらしい。

そして、あつと叫んだ。畳の上でおしっこしている。二・三回はしているなあ。私は許せない。主人は見逃しているらしい。グラグラとこみあげてきた。いきなり首根っこをつかまえようとするとい目散に逃げた。

家中さがして、もう一度部屋にもどった。そして又「やったなあ」畳の真ん中に、おしっこが溜まっているではないか!

今度はやりこめて、キュンと言わせてやると意気込んだものの、敷物に引っかかってドスン。犬の表情がにくい。フスマの穴から此方を見る目「ざまー見ろ若い者には勝てんじやろ、バアさん。あきらめたがいいで」。「ドスンの舞」

声

友達から、電話があったよ「お母さんは？」と言われて「お母さんはもうとつくにあの世へ、僕の母は」と言つといた。

失礼な如何に顔が見えなくても「お母さんは？」ということあるかい。主人をつかまえてブンブン。あんたの声が若い息子の声に聞こえたんじやないかなあ。ウツフツ……。また二、三日おいて、電話。今度は私が出よう。ツーツーツーという音のみ「もしもし誰方」と一番上等の声を出したが切れた「用がなかったら掛けてくるな」と一喝。受話器を置くと又、かかってくる。辛抱強く待った。モシモシも必要なし無言で、受話器がはずれる音がした。声は人を表す、イヤラシイ低い声だ。何言っているのかわからない。ブツブツ……。嫌がらせの電話らしい。ガヤンと力一杯打ち下ろした。相手のことなんか知るか!

その数日後、手紙が来た。「あなたとこ電話不通だネエ。やつと手紙書いたヨ。元気? いろんな事話したかったけど、手紙文は下手だから書けないわ。いやはや、まったく生きにくい世の中。この手紙も何を私に話しかけているのか分からないまま、電話で「ありがとう!」



さくらの向こうに...

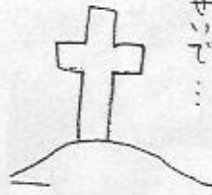
ボクは、この前まで



飼主のケイくんと一緒に遊んだりご飯をたべたりした。

だけど...ボクのせいで...
いなくなっちゃった...

ボクのせいで...



ボクがケイくんの投げた

ボールをとりに

どうろにでなければ...

こめんね...

ゴンは、帰ることにしました。

すると、川の近くのサクラの木から花びらがゴンの背に落ちてきました。

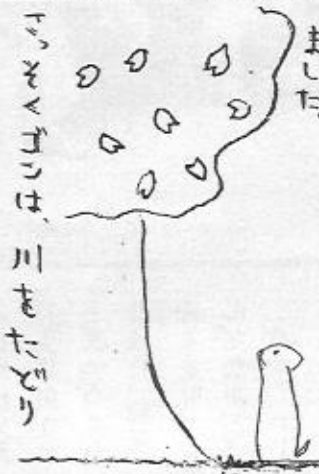
「あなたの手にはすきませんが...」

ケイの命と言ったのは水はあなたの手のまきまからこぼれてしまったのです。でもあなたがまだ水をすくうことができます。

この川の水と向こうの一本サクラの木があります。

そこへ行きます。花びらは、

あなたとボクを救ってしました。



でも、ゴンは、川をたどり

ながらとんとんあるいていき

ました。とんとんとん...

川の向こうのサクラの

木が一本ありました。

たんとそこには、ケイくんの花びらが

ありました。

ゴンは、川をわたることにしました

ですが、ゴンはケイくんの「さくら」をあげてしまいました。それは、まだケイくんがそこへ入ってしまっただけのことです。

「川の向こうへ行きたかったです。」



その川の向こうへ行くと、美しい大きな

な木はここにないよ。

サクラの木が風で大きくゆれました。

すると、ケイくんの声がきこえま

した。

「ゴ、ゴンはまだボクとは会え

ませんね...」

ゴンは体の中のでけがまだ口時

をまねてました。ゴンの口が口時を



「した。また会えるよ...」だから

それまで、ボクはボクがいた。ボクは、この川をわたることにしました。



「ボクにはおかしな...。とけいのははは神様がきこえてくれた...」

「さくら...」

「さくら...」とけいが口時にさくら

ね、と水までがくは...」

「さくら...」

「さくら...」

またケイくんは、ゴンは川の向

うに、ほそぶりに、さくらが、さくら

をくれました。

また、さくら...」

さくら...」

おわり

大雪山縦走⑥

梵店主

入山以来はじめての快晴の日、石狩岳のピークから大雪の山脈(やまなみ)を展望した。観岳のような荒々しい山岳はないが、北アルプスよりスケールが大きい。

氷河の面影を残すカールが柔らかい曲線を描いている。大きな雪原がいくつも見えている。夏ならば、彩り豊かに花々が咲き乱れるのだろう。よっちゃんは、こんな厳しい冬ではなく、夏か秋にふたたび訪れてみたいと思う。おもむきがまったく異なるであろう山々のたたずまいの中にわが身を置いてみたい、山に立ちむかうのではなく、山と触れ合いたい、そういう登山がしてみたいと思う。大島亮吉のいう「静観的」な山登りが……。

石狩岳からは稜線が細い。東側に張りだした雪庇を避けながら、トラバース気味に進む。雪面はプレイカブル・クラスト、表面は固くクラストしているが、その下は柔らかい雪なので、体重をかけるたびに雪面が割れて膝までもぐる。しかも傾斜がきついので、ひじょうに歩きにくい。重い荷物がこたえる。久しぶりに浴びる陽ざしは強い。全身から汗が噴き出てきた。どんどん体力が消耗していく。一二時過ぎに川上岳に着いた。少し早いが、S太は躊躇することなく、よっちゃんにテントを張るように命じた。

翌朝も快晴だ。だが、低気圧が近づいているので、午後からは天気が悪くずれてくるはずだ。昨日のような歩きにくい細い稜線を進む。午後になると、案の定天候がくずれ、霧が立ちこめてきた。何度も地図とコンパスをにらみながら、手探りするように一歩一歩慎重に進む。

やがて周りが真っ白になって、動くことができなくなった。いまだこにいるのか、視界が失われた不安に襲われる。二分ほどじっとしていると、ガスが晴れ、視界が開けてきた。安堵したのもつかの間、ルートを誤っていたことに気づいて、愕然とする。また登りなおさなくてはならない。ルートを修正し、起伏の多い雪稜を縦走すると、次第に稜線が広くなってきた。スキーにはきかえて、さらに進み、その日は沼ノ原山の手前でテントを張った。

翌日もガスで視界が悪い。そのうえ風が強く、吹雪だ。気温はマイナス一七度。そんな状態の中、沼ノ原から五色ヶ原へスキーで移動する。「原」というだけあって、ゆるやかな起伏があるくらいで、広々としている。吹雪とガスでなかなかルートが読めない。ゴーグルに付いた雪を手袋で払いながら地図をにらむ。あとは山勘でいくしかない。五色ヶ原に入ると、ゆるい登りとなり、さらに二時間ほど西に進むと、平坦な場所に出た。ここが予定のキャンプ・サイトにちがいない

と決めて、テントを張ることにした。まだ九時過ぎだ。三人ともに、この三日間の行動で疲れはてていた。あすのために半日休養することにする。明日はこれからトムラウシ山を日帰りであタックする予定なのだ。

テントを張って、周りに雪のプロックを積みあげる。広い平原では風をさえぎるものはない。テントを吹き飛ばされるほどの強風が吹き荒れる。テントの張り綱を固定するベグは雪深く埋め、メインの張り綱はピッケルで固定した。

先にテントに入ったS太とM蔵はもうシュラフにもぐり込んで、ラジオを聞いていた。よっちゃんもすばやく個人装備を整理して、シュラフに入った。S太は目をつむっているが、寝てはいない。M蔵は目を開けたまま考えごとをしているようだ。外は吹雪、テント内は静かだ。雲の切れ間から陽の光がわずかにこぼれて、あたりがすうっと薄明るくなっ

た。と思う間に、またすぐに冷たい灰色の世界に戻る。いつのまにか、S太とM蔵は眠りについていった。

よっちゃんは、北海道の山名を不思議に感じていた。大雪山とか、五色ヶ原、沼ノ原というのは漢字から意味がわかる。でも、石狩岳や音更山、忠別岳は意味がわからない。トムラウシ山のようなカタカナはアイヌ語であろう。そこでよっちゃんは、北海道の山名について図書

館で調べた。

ここ五色ヶ原という地名は北アルプスにもあるが、夏には高山植物の色とりどりの花々が咲き群れることから名づけられたのだろうとよっちゃんは思っていた。調べていくうちに、仏教的な意味があることがわかった。五色というのは阿弥陀浄土の莊嚴をあらわしているらしい。いまは雪地獄のような地でも、夏になれば、美しい極楽のような世界に変わるのだ。その美しさに感動して五色ヶ原と名づけたのだろう。密教では、五色は宇宙そのものをシンボリックにあらわしているという。

極楽浄土にせよ、宇宙にせよ、それは明治以降に和人がつけた名前である。北海道の先住民であるアイヌの人たちは山にどのような名前をつけているのだろうか。またアイヌの人々にとって山はどのような意味をもっているのだろうか。

大雪山

大雪山

大雪山

大雪山



タケシと式部の同棲生活は、二人の愛情が心にも体にも満ちあふれ、互いにそれを確かめあひながら幸せな日々を送っていたことだろう。同棲生活を始めて半年ほど経った秋、式部は身ごもっていることに気づく。胎内に宿った、この新しい命を式部ほどのように受けとめたのだろうか。とまどいながらも、タケシの子を産む幸せをかみしめていたのだろうか。

タケシは式部と結婚しようという心積もりでいた。しかし、庄内藩の士族の血を引くタケシと信州の貧しい寒村に生まれた式部、この二人がどれほど愛し合おうと、結婚するということが不可能に近かった。タケシの父は、教育勅語の忠孝愛国をモットーに生きてきた厳格な教育者である。この誇り高い父が結婚を許すはずがなかった。家長が認めなければ、結婚は成り立たない。当時の結婚は本人同士ではなく、家同士が縁戚関係を結ぶことであった。当然、家の格がものをいう。タケシと式部のような自由恋愛で結びつく男女はたくさんいた。けっきょく結婚は許されず、身ごもった女は捨てられ、行き場を失って自殺するものもいた。当時の自殺者の多くは未婚の

た女性だったのだ。

大正時代は、私生児は新生児の一割と意外に多い。随胎罪というものがあって、避妊、中絶は自由にできなかった。つまり、生殖につながるセックスは認められなかったのだ。公娼制度があるにもかかわらずである。こういう矛盾を国家は女性に押しつけていた。たとえ強姦されて妊娠しても、産まざるをえなかった。女性は「産む機械」だったのだ。実際は、生活苦から逃れるため妊娠中絶はあつた絶たなかったが。

タケシは結婚ができずとも、式部と別れようとはしなかった。これから生まれてくる子と共に家庭をもとうと考えていた。

やがて、式部の身に異変が起こる。激しい咳、発熱、血痰、——結核である。肺病といわれ、当時もつとも恐れられていた結核が式部の身をむしばんでいた。結核は国民病とも、亡国病ともいわれ、死亡原因の第一位を占めている。日本の衛生状態はひじょうに悪かったのだ。看護婦でもある式部は結核の恐ろしさはよくわかっていたはずである。特効薬などない。ただ安静にしているしかない。子を産むことによって、自分の死を早めることになるかもしれない……、だが。大正十五年の春、式部は娘を生む。娘はミチコと名付けられた。病原菌感染の危険があつても、この子

をできるだけ手元に置いて愛情をそそぎたいと式部は思っていたようだ。とはいえ、自らの症状は進行し、やせ衰えていくばかりだった。タケシにも負担をかけるようになる。やがて式部はこの東京に自分の居場所がないことを悟る。死期が迫っていることを自覚したのだろうか。

「最期の場所はグンダリしかない」。式部は、ミチコを連れてグンダリに帰る決意する。十六のときに後にして以来、五年ぶりのグンダリである。父母、弟妹たちは、結核を患った式部と幼い子を受け容れてくれるだろう。二〇軒足らずの小さな共同体は二人を包んでくれるはずだ。

タケシは式部の決断を認めた。衛生状態のよくない東京よりは、信州の山村のほうが療養にははるかにいい。仕事のあいまに自分が信州に通えばいいと思っていた。タケシはその後も、式部とミチコとの縁をけつして絶とうとはしなかった。タケシに付き添われ、式部と娘はグンダリに帰った。タケシは月に一度はグンダリを訪れていた。それから二年後の秋、グンダリを訪れたタケシは父が亡くなったことを式部に告げる。初代校長を務めた新潟の中学校に二十年ぶりに招待され、校庭に集まった生徒の前で講演中に突然倒れ、そのまま息を引き取った。タケシ

と式部の結婚を認めない父であつたが、タケシにとつて尊敬する父でもあつた。

それから二カ月後、目の覚めるような紅葉が終わり、日に日に寒さがつり、雪の降るのを待つばかりの初冬、蒼白くやせ衰えた式部は二歳の娘を残して静かに息を引き取った。二十三であつた。

そこにいたならば、孤独のなかに沈む式部の手を取ってなんとか繋ぎとめようとし、その思いを一滴漏らさずにくみ取ろうとしたであろうタケシの姿はなかった。

その後タケシは、命日の十二月九日には毎年グンダリを訪れた。小さな墓標の前で手を合わせるタケシの姿は今も村人の眼に焼きついている。

父が蔵王の遭難で失われた九人の菩提を一生かけて弔おうとしたように、タケシは式部の冥福を一生かけて祈つた。



縁談

昭和十七年九月、半年早く女学校を卒業し、戦争中ということもあって何となく落ち着かない日々を過ごしてしました。年の瀬迫まるころ同級生が何人か集まって、「新年を迎えたら、みんなが集まりましょう」と申し合わせたのです。女学校時代の友だちに連絡して、年が改まった一月早々にお集まり会をしました。料理屋の広間をかりて、みなさん久しぶりにあって大喜びでした。

次から次へと話は尽きません。話題が涌き出てくるようです。やがて結婚話に花が咲きはじめました。みな適齢期ですから、お見合いをしたとか、今進行中だとか、もうすぐゴールインという人もいて、「どちらへ?」どのようなお相手?」と興味津々の友だちはつきつきに尋ねます。私は目下のところ縁談の話はなく、皆さんの話を黙ってきくばかりでした。

そのとき私の隣に座っていたお友だちから「エンちゃん、島田に髪を結ってみない?」と誘われたのです。島田というのは島田雷(まげ)のことで、婚礼とかハレの日に結う髪型です。そのとき私は、髪を後ろで左右に振り分けてゴム紐で両方を結わえていました。

私は変わったことをするのが好きなので、「あら、いいわねー。いい思い出になるんじゃない」とすっかりその気になったのです。

その日は二人で銀座へ行つて、着物の下着に付ける半襟を見て回りました。家に帰つて、お母さんに相談すると「へえー、二人で相談したの。髪結いさんに連絡しなくてはね」といつてくれます。母の了解を得て、私たちは同じ日に髪を結ってもらい、写真屋さんで会うことに決めました。

髪を島田雷にし、着物を着た姿を写真におさめてもらうのはいいのですが、私の体型は格好がいいとはいえませんが、洋服を着ても着物を着ても、あまり似合わない。「この子は何を着せても着映えしないのね」と母はいつも嘆息するくらいでした。そんな私が、自分から「日本髪を結つて着物を着たい」といいたしたもの

ですから、母からは「天気が変わらなければいいけどね」と冷やかされました。予定の日は、一月十日。髪を結つてもらい、着物を着て会う時間は四時。どうにか間に合い、二人で大笑いしながら写真を撮ってもらいました。「どんな写真ができたかあがらね」といいながら、銀座へ出てあんみつを食べて帰りました。

数日後、二人で写真を受け取りに行きました。開いて見て、二人とも笑いが止まりませんでした。それから何年経つても、その写真を見ると、笑いがこみあげ、当時のいろいろな出来事が思い出されま

す。春が近づき、桜の花が咲き出すころ、鹿兒島のお友だちから写真が送られてきました。「この度十一月三日に結婚した彼の従弟です。彼と同年で仲の良い親戚です。貴女の写真をお見せしたら、ぜひ話を進めてほしいと写真を預かりましたので、さっそくおことづけします。よければ、いつでも上京します」という手紙が添えられていたのです。「あら、この人! 俳優の誰かに似ていない?」というほど

の男ぶりでした。彼はお友だちの仲人さんの次男で、ご主人とは従弟にあたりますから、もしご縁の話がうまくはこべば、私と彼女とはとても近い親戚関係になる。あの楽しかった夏休み旅行のとき、たいへん親しく歓迎してくれた彼女の家族のことを思い出し、あの友と親族の一人になれると思ふと、嬉しくなりました。写真を見て、すぐにお会いしますという旨の返事を差しあげました。「善は急げ」とばかりに、四月早々にご両親とご本人が上京されました。

その方たちのお住まいは大阪でした。夕方大阪を発つて東京へ着くのは、早朝です。その頃は汽車で十二時間かかりました。家に來られたのは十時過ぎです。ものない時代ですから、接待用のお菓子なんて手に入りません。手製で羊羹をつくつたのを思い出します。珍しいものばかりいただいで、とご両親が喜んでくださったのを覚えています。

ご本人は役所務めで忙しく、「明日は予定があるので」とご両親を残し、先に帰られました。しばらくして、公衆電話から「自分は充分気に入ったので後はよろしく頼む」とのこと。ご両親も大喜びで、「私たちがたいへん気に入りましたので、よろしくお願い致します。こんなうれしいことはありません」という。話がトントン拍子で進みました。

ご両親は、今夜は世田谷の親戚の家に泊まるとおっしゃって、「ぜひそちらにも来ていただきたい」と住所を教えてくださいました。次の日さっそく私は父と母と世田谷のお宅へ伺つたのです。そのお宅でも、以前からずっと親しかつた間柄のように心安く接していただきました。それがたいへん嬉しくもあり、私は、ご縁というものは不思議なものだなという思いにとらわれていました。



☆バスが来て走る八十路の秋を知る

☆新機種に右往左往の老夫婦

☆コンクールきらめく瞬間の待つ時間

朝日新聞に登場

高校野球の地区大会での優勝校がほぼ出揃い、大阪の金光大阪が甲子園出場を決めた翌日であったと思う。いつものように店番をしている昼過ぎに、若い男が店に入ってきた。「あのう、こちらが「芥川だより」を出しておられるんですか?」「ああ、そうですけど」「話を聞かしてもらってもいいですか?」「いいですよ。どうぞ、掛けて下さい」男は名刺を差し出した。朝日新聞社会部記者・Iと印刷されている。I君は「芥川だより」を読んで興味を感じて取材に来たのである。

私は、一通りの説明をして後、次の取材する人を紹介した。掲載された紙面は大阪版の「街ぶら」である。芥川の風情を一面に書いてくれた。新聞記事に上手い下手の評価は適切ではないが芥川の雰囲気を感じられる紙面であった。

裏方さんいらっしやい

久々の登場、パソコンよるす屋です。今回はパソコンやワープロを使うにあたって誰も最初の障害になるであろう文字入力、いわゆる「キー打ち」についてお話しします。

パソコン教室などで、初心者向けに基本的な操作を教えますついでと、短時間で覚えられる「キー打ち」の効率のいい学習方法を、ちゃんと教えてくれるところが案外少ないんですよ。

正しい訓練方法でやればカンがいい人であれば4時間ほどで9割方覚えられます。実際、私も半信半疑で40代女性を相手にキーボードの上をハンカチで隠し訓練させていただきましたが、訓練後の試験で本当に覚えていて驚いた経験があります。

ところがこの「キー打ち」訓練は決して楽しいものではなく、娯楽としてパソコンを習おうとしている人にはむいていないんですよ。

「キー打ち」練習用として、いろいろお店で売っていますが、これはゲーム感覚で遊ぶことを目的に作られているため、これを使って学習するには相当な時間と労力をかけないと覚えられないんですよ。何事も楽しんで覚えられないってことですかね(笑)



ハイキングの報告

九月十三日(木)に七人で、芥川から歩いて今城塚古墳を見学すべく行きました。が、九月一日より改修工事が始まっていて見ることは出来ませんでした。北側の「ふるさと」で見学とお昼休憩をした後、ハニワ工場公園まで足をのびしました。

発掘した窯の観察ができるハニワ工場館内でビデオの上映を楽しみ、次は安満宮山古墳に行こうと言う話で盛り上がりました。

帰りはバスを乗り継ぎ帰ってきて、珈琲を飲みながら反省会をしました。万歩計では一万二千になっていました。

「芥川だより・ハイキングのお誘い」

安満宮山古墳古墳は、中国の古い年号銘がある鏡が出土して有名になった。高槻市市制施行五十五周年記念として築造当時のままの姿に復元され公開されてる。

古墳からの見晴らしも良くて、大阪平野を一望できるとか。時間の都合のつく方は、秋の一日のんびりと歩きましょう。

▽日時/十月十一日(木) 九時梵集合
▽予定コース/安満宮山古墳

「ああ…腹が立つ!」

梵店主

常連客のkさんが店に来て言う。

「何が腹立つの?」と聞けば

「私は十分の処理に腹が立つのよ!」

「コムスンと同じ様なことをやってるから…」

「まあ、世の中似たり寄ったりだからね」のんびりそうかえす私に

「何言ってるのよ!。金を払ってるのは国じゃなくて、私達よ!」

よく聞けば、kさんの腹立ちは『十分超過した介護時間をどうするか。切り上げか、切る捨てか』という点である。彼女は介護の現場で働いていて、そこでは超過の十分間を切り上げにして三十分超過したことにするのが当たり前になっている。働く側もケア・センターも両者が得になるからいいじゃないかと言うが、こんな事をしてたら介護制度が崩壊して、結局は自分達が職を失い、介護を受ける人も困ることに早晩なる。

ふむ…そうだそうだと頷いた。

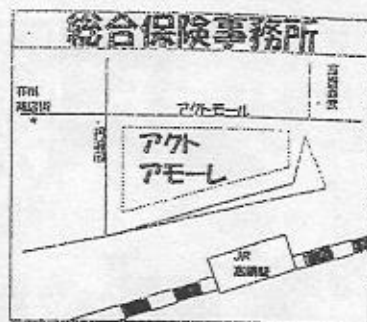
「介護事業で儲かるなんて事はないのよ」そう言いきるKさんに私は彼女の生きてる気概を感じた。二人で話が盛り上がったのは言うまでも無い。残暑の残る9月の昼下がりのひと時であった。

総合保険事務所

(高槻芥川商店街内)



- 私の保険って今のままでいいの?
- 訪問されると気をつかう!
- 資料請求すると資料が一杯くる!
- 電話で聞いてもよくわからない!
- 早くしないと歳を取る!
- どうしたらいいの?



保険の身近な相談所へ行かずに損していませんか?

無料保険相談会とは?



代表取締役 谷井 靖

“無料相談会”の“無料”には、気楽に来て下さい。…という気持ちを含めています。といっても、何処の誰か、どんな顔か、何処に店があるか分からなければ“気楽に”って言われても、不安に決まっています。私も考えました。だから、ここ高槻芥川商店街にいたしました。最近では、こんな顔が店に居ても気楽にお声がかかるようになりました。「安心・安全・心暖かい!!」です。どうぞ気楽に、安心してご相談下さい。

相談会におこしいただいた方に、まず、生命保険の基礎をわかりやすく説明します。その上で、今加入している保険がどんな内容になっているかを解説。理解できるまで、ゆっくりと時間をとります。必要な保障のうち、社会保障で補いきれない部分を生命保険はカバーしてくれるものですが、十人十色。目的や目標、年齢や家族構成の違いによってさまざま。あなたのご家族にとって、理想の保険と一緒に、じっくりと考えていきます。



ファイナンシャルプランナー 上田 浩



社会保険労務士 鈴木 浩昭

年金制度や医療費負担などの先行きの不安は多くありますが、今現在、公的な保障がどれだけあるかということを知っていただくことがまず大切です。又、事業主の方へは、労働保険の特別加入や各種給付金、助成金等についての確なアドバイスをさせていただきます。

無料相談会開催概要

- 日時 毎週、土曜日・日曜日(他の曜日を希望の場合は、相談可)
- 電話予約の上、相談会来店の方に、アフラックのちびちびダックをプレゼント!!
見直し相談はもちろん、これから新しく加入を検討されている方に対しても、加入時の注意点などを、FPが丁寧にアドバイスしてくれます。

ご来店をお待ちしています。営業時間は午前10時から午後6時までです。

0120-801-836

〒569-1123 高槻市芥川町2丁目B-17(芥川商店街内 総合保険事務所株式会社)



退職①

サラリーマン・エッセイ①

明石 幸次郎

天王寺で会社のOBと待ち合わせして、昼飯を食べながら歓談する機会がありました。この先輩は三年前に退職した私の元上司です。会うなり会社の事業部の状況が気になるらしく「最近の売上げはどうや。赤字は少なくなつたか？ 人事異動はあったか？ 取引先のF部長はまだいるのか」等々、立て続けに質問をしてきました。長年営業の第一線にいたためか、会社のことが気にかかるようです。彼の思いを察して、私の方から連絡して会うことにしたので。私は今年で五七歳、定年まであと三年に迫りました。定年を過ぎてても会社のことが彼のように気になり、後輩から情報を聞きたいというふうになるのだろうか？

彼は、六〇歳の定年をはさんでまる二年間、ずっと一人で両親が逝かれるまで介護をしたそうです。たいへん孝のあついで、納得いくまで孝行し悔いはないと言っていました。ようやく介護の肩の荷が下りたと思つた昨年、彼が肺がんに罹り、手術をしてやっと回復したところだという。定年を迎えて会社の束縛、責任感から解放され、家庭では子育てを終え、やっと自由を

得たかと思える時期に、親の介護と環境の変化から来る自分の身体の不調が重なる、といった問題が共通して起こり易い。定年後の経済的な問題と合わせて、我々中高年の大きな課題である。

この年代の人は会社と共に自分たちも成長して豊かになり、人間関係の大部分と自己形成を会社を介してつくり、云わば自分の運命と人生を会社に委ね、会社もそれなりに社員に応えてきたように思われます。特に昭和三〇年代半ばから昭和四〇年代にかけては、企業は大量に大卒者を採用し始め、昭和四九年の石油ショックまでは右肩上がりの経済成長と共に企業の業績も伸びました。それに伴い給料、ポストも増え、余程の失敗をしない限りは、部長位にはなれた。上手くいけば役員の可能性もあった。そういう会社に人生を賭け、人生を委ねて来た年代です。会社も終身雇用、年功序列賃金、福利厚生(社宅、独身寮、運動施設、レクリエーション費用補助、保養施設等)などの制度を作り、従業員を抱え込んできました。会社と従業員が相思相愛の関係にあつたお互いにとつては良き時代です。

この先輩も昭和四〇年代に途中入社し、最後は営業部長で六〇歳の定年を迎えました。今は企業年金と厚生年金を受給して生活し、老後の生活を保障された良きサラリーマンの最後の世代

です。私のような、まだ大学生の息子二人を抱える年代よりは、より豊かな生活を送っている様子である。

現在では、バブル崩壊後の企業業績の長期低迷によって、企業と従業員の相思相愛の関係が企業サイドから社員に清算を突きつけられ、終身雇用関係は崩れ、年功序列賃金から、成果、業績主義賃金と若手抜擢の実力主義、福利厚生制度の廃止などで、社員、特に中高年世代にとつて今までと違った厳しい状況になっていきます。

我社も数年前に五〇歳代の早期退職者を募り、かなりの数の社員が辞めていきました。技術畑の先輩も五三歳で、指名解雇的に辞めさせて、旧帝大卒の高学歴と特化された仕事をしていたのがマイナスになるのか、就職先が見つからず、辛うじてアルバイト的な仕事を生活している様子でした。今ではこの人と連絡が途絶えてしまつた。

この一〇年、数多くの中高年を犠牲にして企業は業績を回復してきています。特に大企業は海外の需要が上向いた事で、史上最高の利益を上げており、この影響で社会が少し明るくなったようにも見えますが、一方では、多くの企業のリストラによって経済的にも精神的にも打ちのめされ、社会に復帰出来なくなっている中高年も数多く存在

しているのです。中高年男子の自殺者が年々増えている事実がそれを物語っています。

食事をしながら、少しビール飲めば、長年の習性で、お互い会社の話題になり、業績とか、あの仕事はどうなったという話になるものです。また人事の話をする時、数年前の上司と部下の関係になってきて、話が尽きません。

「今度は夜に酒でも飲みながらゆっくりと、いろいろ会社のことを教えてくれや、やっぱり現役の時が人生に於ける花やなあ。君も最後まで現役を続けなアカんで」とぼつりと言われたことが何故か淋しく心に響きました。



編集後記

秋を感じる期間が年々短くなりそうにだけに貴重な秋です。貴方の秋の味覚の王者は何ですか？

丹波クリの栗きんとんを売っていた京都・わら天神の近くの店を思い出す。栗だけの甘味が忘れられない。しかし、お袋のにぎったサバ缶も上手い。やはり、新米を漬物で食べるのが一番かな。

釣りいろいろ①

◇魚あれこれ◇

メジナ〔目(眼)仁奈〕

周防春日丸

今年はいつともより早い夜釣りである。

風があれば、特にまじ(南風)が山から沖(海)に吹くときには蚊も少なく、それはよい涼みになる。流れ星を見つけたら、先日の皆既月食を観察しながらの釣りとなるわけであるが、いざ、風がない夜となると、羽音が聞こえるほどに蚊がやって来る。それに魚の当たりがないとなると最悪である。なかなか一挙兩得とはいかないものである。

もちろん、狙うのはメバルである。ゼンゴ(生後一、二年の小アジ)が邪魔をする。これがなかなか合わせられなくて餌取りになる。開いてアジの干物作りに挑戦したこともある。

時として、ハリスが切れそうになるくらい引きが強く、釣り上げられないくらいの手ごたえがある。美しい青い目をしているメジナが釣れることがある。

メジナは「眼が近い」という意味の「眼近魚」から、体長に比べて、あるいは同種や同型の魚に比べて、眼の位置が特に吻(くちさき)に近いものを「メジ・メジカ・メジナ」などと呼ぶところから来ているのであろう。吻というのは眼より前方の頭部。両眼の直前付近から頭部前部までの領域を指している。上顎の口や唇は吻の一部であるけれども下顎は含まれない。吻長は眼の前縁から吻端までの長さをいう。

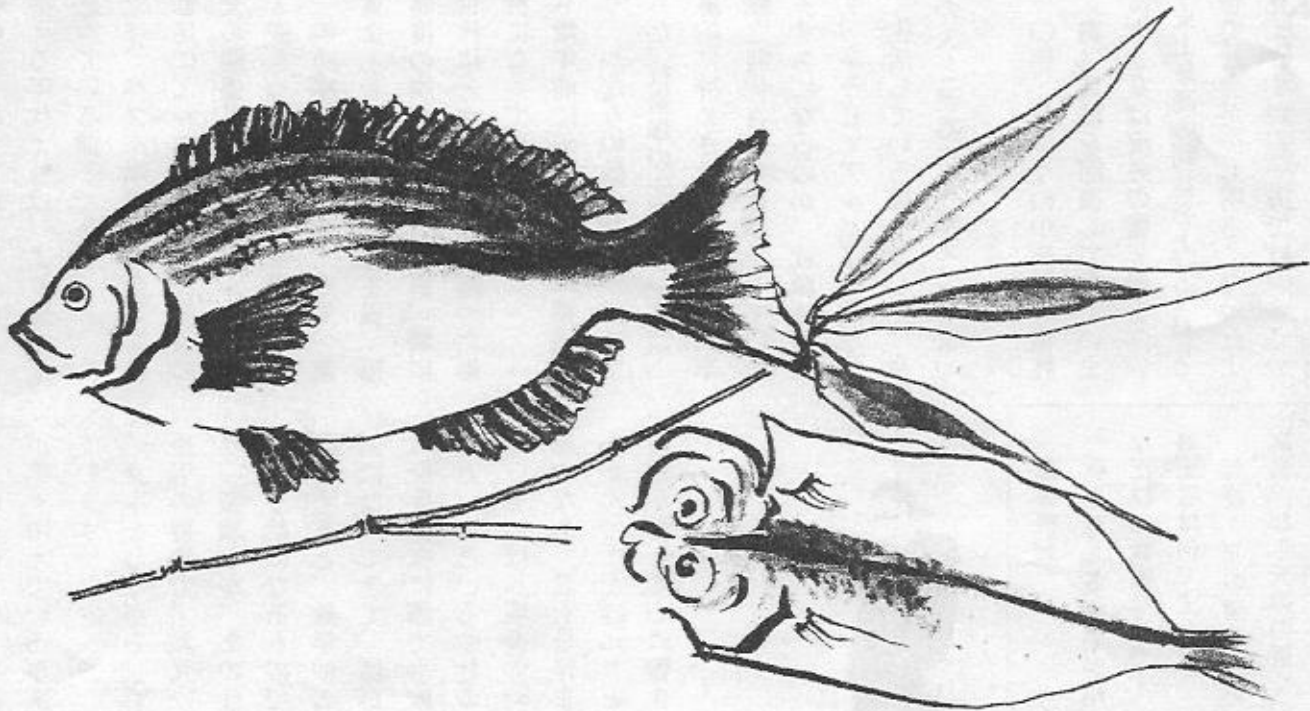
関東では「メジナ」関西では「グレ」九州では「クロ」と呼ばれている。我が島では「クロ」「ネコマタギ」「ネコマたいで通る」とも呼ばれ、食べる人は少ないでしょう。誰も欲しがらない人はいません。

釣り上げたメジナの初めての印象とは、暗いせいかな、なんとこのつべらぼうとした黒い魚だと思った。臭くて美味しくない魚だと聞いているだけに、あまり嬉しくはなかったが、クロダイとともに磯釣りの代表的な魚として有名なだけあって、釣り好きには、引きが強烈で十分堪能できる魚である。

メジナは本来は雑食性の魚で海藻類もよく食べる。夏は動物性の餌を、冬は植物性の餌を食べるからか、夏場は臭みも少なく、「寒グレ」は美味しいと言われている。できれば釣ったメジナをその場でしめて、よく血抜きをしておくと臭みが少なくなる。

最近、船着き場で一〇センチ位のメジナの群れを見る。なぜか「泳げたいやきくん」に見えてしまった。メジナは硬骨魚綱・スズキ目・メジナ科に属

し、広い意味では真鯛やスズキの仲間である。



9月3日(月)6:45 読売テレビにて放映

「ズームイン・SUPER！」

ズームイン



夏も終りの八月二十九日。読売テレビのズームイン・スーパーで放送の収録が芥川商店街で昼からあった。

数日前にたれつとしたTシャツのお兄ちゃんが尋ねてきて「ズーム」という5人で大縄跳びをする商店街応援企画番組に参加して欲しいという話を持ってきた。その人は全国ネットの読売テレビのディレクターの早浪さんで、30回縄とびが出来たら、十万円！という。その口上に魅かれ、事前に練習して挑もうかと思っただけだった。しかし、二十九日当日、読売テレビの早浪さんが選んだ面々を見て、簡単には十万円をくれないんだなあと思つた次第である。

このコーナーは、縄跳びに出場する縄もち二名を含む七名を探して七軒の店を訪ね、店や出場者を紹介しながら最後に皆で縄跳びをする筋書きである。その短い時間の中で、笑いや意外性を織り込んで楽しい番組にしていくのである。七分の放送に撮影が四時間には驚いた。

さて、商店街での収録のヤマ場・縄跳びである。幾度かリハーサルで跳んだが五回と続けて跳べなかった。やはり本番でも三回目に引かかった。しかし、笑い声と歓声で多くの人が取り囲み、テレビ局から派遣された交通整理の警備員も大変であった。

放送は九月三日で、その日放送を見た商店街関係者は朝からその話題で、通りを





スー

「スー・イン・SUPER」商店街応援企画 **スー・イン**

30回飛べたら10万円!...でも3回しか飛ばませんでした...



この方が
小林杏奈
アナウンサー

通る人も声をかけてくれたりして、商店街全体が明るくなった。今年の夏のいい思い出になった出来事である。



読売テレビ
早浪さん

とても熱心な
編集マン